

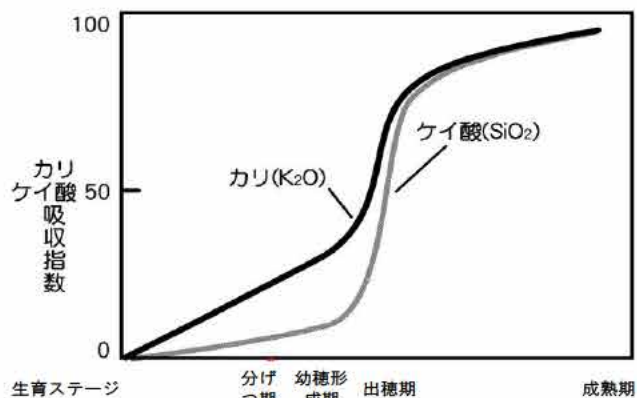
7月の肥培管理

■肥培管理は的確かつ確実に■

稲の生育において6月は稲体を作る栄養成長の仕上げの月であり、また7月は稲穂をつくる生殖成長が始まる月です。収量や品質を決める上で重要な月となりますので圃場を観察し、的確な肥培管理を心掛けましょう。

1. ケイ酸質資材の施用を行いましょ。

稲のケイ酸吸収量は最高分けつ期以降、徐々に多くなっていきます。ケイ酸や加里は倒伏軽減や病害虫の抵抗性向上に加え、高温による品質低下や低温による登熟低下を軽減する効果がありますので積極的に施用しましょう。



加里・ケイ酸吸収の時期別変化

資材名(いずれかを施用)	散布量	散布時期
けい酸加里 (ケイ酸 34%・加里 20%)	20kg/10アール	コシヒカリの場合は 6月下旬
カリ投くん (ケイ酸 35%・加里 33%)	4kg/10アール 200g×20袋	

2. 幼穂長や生育を確認して適切な穂肥を行いましょ。

穂肥は適正な着粒数と登熟向上のために必ず幼穂長や圃場ごとの生育(草丈・葉色・茎数)を確認して適期適量で施用しましょ。

①基肥一発肥料の場合

穂肥施用時期に葉色が淡い場合は窒素量不足が予想されるので穂肥で補いましょ。特に日本晴などの倒伏しにくい品種は葉色などをみながら積極的に施用しましょ。

※コシヒカリに施用する場合は分施穂肥の2回目に相当する時期に施用



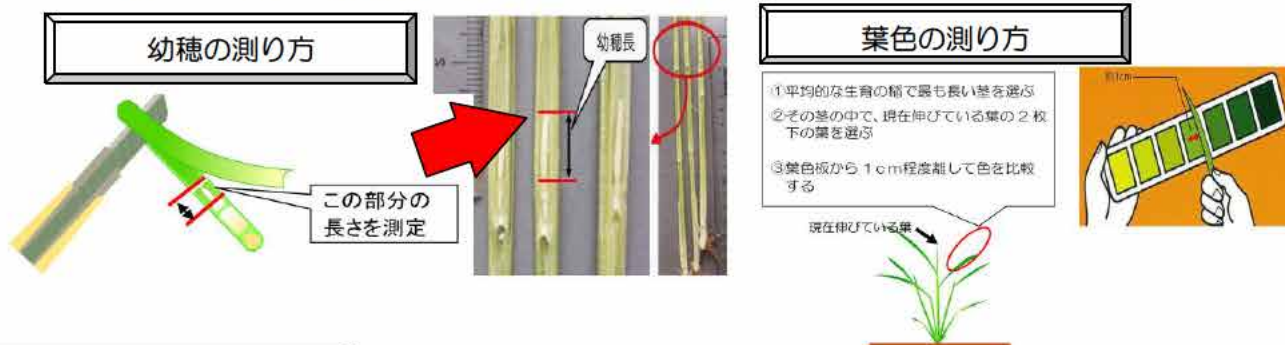
②分施(基肥・穂肥別施用)の場合

【1回目の穂肥】

穂肥の施用時期に注意しましょ。施用が早い場合、穂につく粒数は増加しますが、稈が伸び・止葉が長く・倒伏しやすくなり、結果的に登熟が悪くなります。また施用が遅れると穂につく粒数が不足し、玄米中のタンパク含有量が高くなり、食味を低下させる原因となります。1回目の穂肥は時期を的確に実施しましょ。

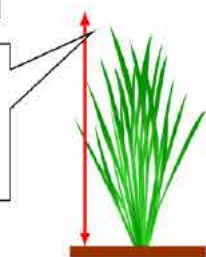
【2回目の穂肥】

近年の温暖化により夏場の稲体の活力が低下し、8月上旬の出穂期に葉色が淡くなっていることも胴割れ米の発生要因と考えられます。熱い夏場を乗り切るために2回目の穂肥は確実に実施しましょう。



草丈の測り方

- ①垂れている葉を垂直に起こす
- ②田面から葉の先端までの長さを測る



主要品種穂肥分量目安一覧表

品種	1回目		2回目	
	時期	10%施用量	時期	10%施用量
ハナエチゼン	幼穂長1~2mm (6月24日頃)	適正 15kg やや過剰 12kg	1回目の10日後 (7月4日頃)	適正 15kg やや過剰 12kg
コシヒカリ	幼穂長10mm (7月16日頃)	適正 12~15kg やや過剰 10kg 過剰 -	1回目の7日後 (7月23日頃)	適正 12~15kg やや過剰 10kg 過剰 10kg
日本晴	幼穂長1~2mm (7月15日頃)	適正 15kg やや過剰 12kg	1回目の10日後 (7月25日頃)	適正 15kg やや過剰 12kg

3. コシヒカリ幼穂長 2mm 時点での倒伏診断基準

①草丈・葉色・茎数から診断

生育状態	草丈	葉色	茎数(株あたり)	倒伏危険度
適正生育	75cm 未満	3.5	25 本程度	小
過剰生育	85cm 以上	4.5	30 本以上	大

②第3葉身長から診断

上位第3葉身長が45cmを超える場合は
下位節間が伸長している可能性大



葉鞘に沿って葉を
まとめたときに株
元から最高位にあ
る葉が上位第3葉

倒伏の危険性があると判断した場合はスマレクト粒剤
【倒伏軽減剤】を施用しましょう。

商品名	使用時期	施用量
スマレクト 粒剤	出穂15日前 ~10日前	2~3kg/10a



4. 病虫害対策

いもち・紋枯病対策として、移植については苗箱施薬としてルーチンエキスパート箱粒剤が使用されています。移植でも箱施薬をしていない場合や、直播の場合はオリゼメート粒剤を早急に散布し、昨年紋枯れ病の発生が多かった圃場では、リンバー粒剤を7月上旬から中旬に散布してください。



いもち病



紋枯病

(リンバー粒剤は特別栽培の場合は直播栽培でのみ使用でき、移植栽培では使用できません。)